



「え、十月って三十一日まであったっけ？」

桜庭は軽く驚いた。おもむろに左手を握る。そうしておいて、飛び出た指の付け根の関節を数え始めた。

「一、二、三……あ本当だ」

レトロな方法で月の日数を確認したあと、感にたえないようにうなずいた。

「すごいっ！」

丸い目をますます広げる桜庭に、鈴木浩二は体を後にそらして距離をとった。小さく苦笑い。

桜庭には少々芝居があったところがある。

「これまで真実だと信じていたことを、根底からひっくり返されたような感じ。なんかすごく新鮮な気分！」

桜庭は一人で勝手に盛り上がったが、正直浩二はいい気がしない。ただでさえ、地味な日にちななのに、その存在自体なきものにしないで欲しかった。

浩二の誕生日は、十月三十一日だ。中途半端な秋の一日。何の記念日も絡まない月末で、家族でさえ、うっかりスルーしてしまうこともある。と言うのも、浩二の兄の誕生日が三日後の文化の日だからだ。物心ついたときから、自分の誕生日も学校が休みのこの日に合わせて、祝われていた。たぶん生まれたときから一緒にたにされていたに違いない。どうしたって、兄メイン。

「でもあれだね、なんか妙に鈴木に似合っていたりして。あ